

アジア研究教育ユニット（世界展開力・特別経費）平成 27 年度教育研究報告書

| | |
|----------------------------|--|
| 事業課題名 | 東アジアにおける日本哲学研究—若手同世代との対話実践 |
| 代表者名 | 上原麻有子 |
| 事業概要 (600 字程度) | <p>本事業計画は、2013、2014 年度ともに採択されたものである。「継続の意図」があることは、これまでの応募書類にも示しておいた。この事業は、文学研究科・日本哲学史専修の現役学生、および若手 OD の研究を活性化させ、推進することを目的とする。国内外で組織された学会のパネルで、毎年、専修所属の学生、OD が研究発表を行い、日本哲学発信のスキルを磨く、また国内外の大学院生、研究者と対話を実践する場を提供するものである。このような場は、院生、OD の研究業績作りにも貢献する。</p> <p>今回は、「哲学若手研究者フォーラム」(The Japan Forum for Young Philosophers (http://www.wakate-forum.org/data/2015/theme.php)) で、3 人の院生自身が企画するパネルで、各自が発表し、議論する。日本哲学史専修では、「日本哲学」を学生・OD が京都大学から外に(国内外に)発信するという活動を継続させたいと考えている。</p> |
| 成果の概要 (800 字程度) | <p>2016 年度は、以下の通り、院生 3 名が OD の引率のもと、ワークショップで研究発表を行った。 7 月 16 日・17 日・9 時 - 11 時・国立オリンピック記念青少年総合センター 511 号室 パネルタイトル：ワークショップ「日本哲学のはじまりをめぐる ―明治期における倫理学・論理学・美学の形成から―」</p> <p>このパネル発表を通して、院生らは各自の研究を、近代日本における「哲学」の発生という歴史的な問題との連続性において捉え直す機会を得たようだ。具体的に言うと、それは、各発表者が、近代という時期における「倫理学」「論理学」「美学」の三つの学問領域そのものの発生に即して、相互に自らの「日本哲学」の研究テーマを比較し、対話する場となったということである。</p> <p>また、会場ではいずれの発表も、多くの質問者の関心を集め、他分野の若手研究者との議論が深まり、交流を開始する機縁をもつことができた。例えば、一人の院生は、明治期のドイツ観念論美学受容と現代の日本の美学史への影響関係をテーマとし扱ったところ、この問題についてドイツ観念論研究者や明治思想研究者から、複数の質疑応答が寄せられた。この院生の「ドイツ観念論的枠組みを越えた日本美学史の可能性とその方法論」という問題提起は、九鬼周造の思想をはじめとする日本美に関する哲学的・美学的言説の可能性を歴史的、方法論的観点から再評価する、という新たな視点を備えており、日本哲学以外の領域と学際的な研究交流の可能性を呈示したと言える。</p> <p>この発表の経験は、参加した院生たちそれぞれの、博士論文・修士論文の研究に弾みをつけた。一方、引率の OD は、三名の院生の発表準備のケアや指導もこなしながら、同じ時期に自らも博士論文の口頭試問の準備を行っていた。本企画の経験を通して、研究者・教員として大きく成長したと思われる。同年度の終わりには、無事、ある大学への常勤職を獲得するに至った。さらに、このワークショップに出席していた、西周研究の活性化に尽力している若手研究者が、後日、島根県立大学の西研究者である教授らとともに、日本哲学史専修に共同研究と「西周」出版事業への参加を依頼してきた。このワークショップへの参加という本事業を通して、日本哲学専修の研究の発展がこのような具体的な形になる可能性ができてきていることも、記載しておきたい。</p> |